



末永國明先生の思い出 ——末永先生を偲ぶ会——

去る平成21年8月8日、東京・九段のホテル・グランドパレスに生前末永國明先生とご親交のあった方々にお集まりいただき、先生の思い出を語っていただきました。

佐藤猛郎先生：本日は暑いところを末永先生を偲ぶ会に皆様ご参集いただきまして、誠にありがとうございます。私は末永先生のグループに入れていただいていたからかれこれ30数年になりまして、英語の教科書の編集のあり方などをいろいろお教えいただきました。そればかりではなくて、先生のお人柄の広さ、お優しさ、それから学識の深さ、そういったものに大変惹かれまして、末永グループのひとりにしていただいて本当によかったと思います。

去る6月18日に先生がお亡くなりになりまして、私どもは本当にショックを受けましたけれども、考えてみますと末永先生はもう86歳というご生涯のあいだにすばらしいお仕事をなさったし、我々もたいへんあたたかく迎えて指導していただきましたので、天寿を全うして立派に生涯をお過ごしになったというふうを考えます。

まずは末永先生を偲ぶ会の発起人のおひとりである倉持三郎様にこの会についてのご挨拶をいただきたいと思います。

倉持三郎先生：私は東京教育大学の学部から先生のお世話になりまして、そしてまた特に文英堂の教科書においてはもう約40年近く末永先生のお世話になりました。いろいろ先生のことを考えておりますと、先生というのはやはり一言で言うと偉大でなかなか真似ができない方なのです。そういうことをしみじみ感じております。こういう気持ちというのは皆様もご同様だと思うので、今日は先生をお偲びしていろいろお話をおうかがいしたいと思います。

佐藤先生：一番最初に、末永先生がたいへん力を入れておられた『ユニコン英和辞典』の編集を精力的にやられました、川端一男先生にお話ししたいと思います。

川端一男先生：私は大学時代に、先生のゼミでアメリカ演劇を卒論にしてご指導をいただきました。その後もいろいろとお世話になりましたが、この20年余、辞書や教科書の編集を通じて、同じ机で親しくご指導をいただくことができたことは誠に幸せなことでした。先生の名文句「ハッとしてグー」な教科書作りの心得を伝授していただいたはずですが、私は「ハッとしてヒヤリ」と反省することばかりで、もっと多くのことをご教示いただいておけばよかったと後悔するばかりです。1年半ばかり前のあるとき先生がさりげなく手を出され、「この指が曲がらなくなってね」とおっしゃったことがあります。今にして思うと、ご病気を押してご指導いただいたんだな、とありがたいながらも申し訳ない思いがよみがえってまいります。

辞書につきましては、たまたま平成のはじめに先生から「辞書を作る計画があるのだが」と声をかけていただきました。私は別の辞書で苦しい思いをした記憶がございまして躊躇しておりましたが、先生は「なに、辞書の研究会をやっているから、ちょっと出てきてほしいんだ」ということで見事に肩を押されてしまいまして、参加することになったのです。研究会はずいぶん続きました。単語一つのレジスターとか、ラベルとかをめぐって、議論が白熱するようなこともあったように記憶しております。末永先生ともうひとりの主幹の山田泰司先生のおふたりでわれわれに好きなことを言わせながら上手に舵をとって、進むべき方向を決めていただいたのではないかと考えています。予定よりもずいぶん時間かかったと思いますけれども、これは素晴らしい辞書ができたなあ、と言えるものができました。特に高校生にとって、これほどいろいろな情報が盛り込まれていて使いやすい、本当に申し分のない行き届いた辞書ができたのではないかと考えております。多くの高校生がこの辞書を使って勉強してくれば本

当に力がつく、それが先生のご希望でもあったのではないかと思っております。

教科書のことを申し上げますと、私はその辞書のすぐあとで *RAINBOW*, *APRICOT*, *Surfing* というシリーズに、*APRICOT* の後半から参加させていただきました。この教科書は特に英語が不得意な、あるいは苦手な生徒のためのものです。先生は難しいことで有名な *UNICORN* などのシリーズだけでなく、この *APRICOT* のような教科書にもまた愛着をお持ちになっていたのではないかと思います。

初めて編集の場に参りましたとき、先生がコンセプトを示されました。“Come back, students!”、不得意な学生に希望を与える本であり、教材は“Universal as well as personal”、著者の個人的な体験が多くの生徒に共感を与える universal な題材、そして“Brave new world”、学力は低いけれども、知的レベルの高い学生、生徒たちに素朴な驚き、wonder、これを与える教材、最後に、“Looking forward to tomorrow”、これは先生がダブリンのバス停でお声をかけたお年寄りの言葉で、目先のことを追わずに明日を信じて基礎をしっかりやろう、そういうメッセージのある教科書にしたい、ということでそれ以来同じコンセプトで今にいたっているのだと思います。

先生は50年にわたって優れた教科書をお作りになられたわけですが、なぜこのように教科書に情熱をお持ちになったのかなあ、と考えることがありました。先生はアメリカ文学の演劇研究の第一人者としてはもちろん、教育者として研究者や英語の教師をたくさん世に送り出されたわけですが、ひとりの優れた英語の教師が生涯に教育を施すことができる生徒の数は限られている。ところが、優れた教科書、あるいは辞書を使えば、同時に何万人も何十万人もの英語の力を育てることができる、興味を持たせることができる。そういう信念のもとに教科書や辞書に情熱を注いでおられたのではないかと思います。そういうわけで先生はそういう形で日本の英語教育を支えられてきたのではないかと思います。先生が今まで日本の英語教育に貢献されたその実績にならしまして、できましたら私たちも先生が開かれた、種をまかれた道を歩んでいきたいと思っております。本当に、お世話になりました。ありがとうございました。

佐藤先生：教科書のことが話題になりましたけれども、続きまして文英堂と末永先生との関係を最初に築かれました益井輝也様にお話をいただきたいと思います。一番最初から二人三脚といいますか、末永先生とご一緒に教科書作りに取り組んでこられた方です。どうぞよろしく願いいたします。

益井輝也相談役：私は大正15年1月の生まれで先生とは同世代の人間であります。先生と初めてお会いしたのはいつのころだったかなあ、と振り返って見たのですが、結局あまり分かりませんでした。それで出版物から調べましたら、一番初めに「中学新研究シリーズ」というのを発行しておりまして、昭和27年のことでございます。それともう一つ「中学基本問題集」というのがございまして、これが28年になります。また文英堂東京出張所が千代田区神田神保町2-20に開きましたのが昭和27年の12月です。これらから推測しまして、おそらく先生とお会いしたのはおよそ昭和27、28年ごろではなかったかと思っております。神保町の事務所のそばの和風旅館の2階の日本座敷で私どもの編集をしているところで初めてお会いしたのではないかと思います。その旅館は寺子屋風でして、こういうところで会議をしているのか、とびっくりしたと同時に、先生はざっくばらんな方だなあという印象を持ったのであります。

それからいろんな企画を先生にお願いして参りました。全国各地で「中学生の集い 学力増進後援会」というのを文英堂の主催で催しておりまして、その講師のひとりになっていただきました。私どもの編集長の田中文治氏と各地の先生と三人で講師になっていただきまして、私も札幌で一度お会いしました。先生は何を話されるかと思って聞いておりましたら、まともな日常学習こそ大切なのだ、というお話でした。さもありませんという感じで受けとりまして、非常にこれは好評でございました。

教科書に着手したのは昭和33年の7月からでございます。 *English for Young Citizens*, *Essential English Usage* など初期の教科書はなかなか採用数が伸びず、先生方にご迷惑をおかけしました。*UNICORN* になってからそれがぐっと伸び出しました。編集部には編集方針が変わったのかと聞きますと、全然変わっていないという返事でした。それなの

になぜ急に伸びたのだろう、と思いました。あるとき営業部員が先生のおられる会議で、「教科書の口絵にアメリカのワシントンの華やかな夜景でも載せたらどうか」という提案をしましたところ、「いや、アメリカの本質は農家が広い原野をトラクターで耕している姿にあるんだ」というような返事をされたと聞きました。私はその話を聞いて、編集方針が変わっていないということと、そういう本質的なことがきちっとしこまれているから、現場の高校の先生に理解をされたのだと解釈しまして非常に感銘を受けました。そんなことで先生には非常にお世話になりました。文英堂の今日があるのはまったく先生のおかげでありまして、非常に感謝しております。ありがとうございます。

佐藤先生：続きまして、末永先生が教科書の編集を始められたときにまず最初にスタッフに入ってくださった飯塚茂様にお話をうかがいたいと思います。

飯塚茂先生：私は末永先生にお目にかかったのは昭和30年で、割と早いですね。そうしますと、もう半世紀以上前ということになります。昭和30年、私はもう廃学になってしまいました東京教育大学文学部の英米文学部助手として採用されました。そのときに初めて末永先生にお目にかかりまして、それからの付き合いになります。ずいぶん長いあいだご指導いただきました。

先生もご苦労なされた時代があったと思います。先ほども話にありましたが、勤務校であった教育大学が廃学になってしまって、何かしら心にあったことと思います。先生はそれから埼玉大学へお移りになりました。埼玉大学の教育学部長も務められたと思います。それから埼玉大学をお辞めになって、また文教大学でも教官になっておられます。先生のご



末永國明先生のお写真と著作・教科書

功績は私などに出しつくせるものではございません。先生が私どもをいつまでも見守ってくださいますよう、お祈り申し上げます。

佐藤先生：ありがとうございます。続きまして末永先生が肝煎りで作られた英語教育の研究会、大塚英語教育研究会の会長を務められました廣瀬和清様に、その頃のお話を含めてお話し願えればと思います。

廣瀬和清先生：私は東京高等師範学校と東京文理科大学で末永先生の後輩にあたります。今お話をいただきました飯塚茂先生、それから先ほど川端先生のお話に出てまいりました山田泰司先生、この三人は同じ高等師範の21年入学ということになります。25年に卒業しまして、それから私は文理科大学を28年に卒業、ということになります。末永先生が教育大学にこられたのが30年で、その頃私は都立高校の教師をしていましたので教室で直接先生からご指導いただいたことは一度もありませんでした。教育大にこられる前の28、9年、その頃は先生は戸山高校の教師をしておられたのではないかと思います。昔の四中ですね。あそこで私のいとこが習ったと言っていましたので、それで正しいかと思います。

私は辞書や教科書の方面のお付き合いはなかったんですが、最初に末永先生と親しくお付き合いいただくようになったのは、東京教育大学筑波移転反対運動をきっかけとしてでした。末永先生はその教育大学がなくなるということに非常に危機感を持たれて、文部省や国会に対する対外的な反対運動の先頭に立って活躍されました。末永先生は英文の先生方を結集する会の中心になって、私たちのような部外者でも教育大学を残そうという意志を持った人間はいろいろなときによく呼ばれたわけです。そういう集まりの中で私はほとんど初めて末永先生という存在を意識したというか、その闘争の中で末永先生がいかに優れた指導力を発揮されたか、いかに綿密に現実を見る目をお持ちであったかということ痛切に認識しました。そして、先生の持っているお人柄や幅の広さも本当に心に響くように感じました。この闘争は結局実を結びませんでしたけれども、いろいろ会合があるたびに池袋へ流れて、そういう

ところから末永先生と酒を飲むという楽しみをおぼえました。

それからしばらくたって、私が大塚英語教育研究会を辞めたときに末永先生のご提案で慰労会という古希の祝いを催していただきました。先生には隣の席に座っていただいて、長時間にわたって楽しい一席を過ごすことができました。それが約10年前のことです。落ち着いて末永先生と酒を酌み交わしたのはそれが最後になってしまいました。今まで数え切れないほど末永先生と楽しく酒を飲んでいただけたわけですが、これから先はそういう機会が永久に失われてしまったことを考えると、非常に残念なりません。先生のご冥福をお祈りします。

佐藤先生：どうもありがとうございました。それぞれたいへん興味のあるお話をいただいて、感銘を受けております。次に末永先生が教育大学で最初にクラスを持った教え子であられる須貝猛敏先生にお願いいたします。

須貝猛敏先生：私は昭和32年に英文科に入りまして、担任の先生のおひとりとして末永先生にお会いしました。教室での先生のご様子を覚えている仲間によりますと、先生は紺の長いコートを颯爽と羽織って教壇に立っていらっしゃった。このイメージだけでもすごく若々しい先生の姿がわかります。そしてあるとき先生がこうおっしゃったそうです。「英語とか、アメリカ文学をなぜやってるのか、ということ人を人に聞かれたら、好きだからやってるんですよ、と答えるようにしています。それが一番いいですよ」とおっしゃったので、それを聞いた仲間は「いふんと激励された思いだったそうです。考えてみますと、戦時中を体験なさった先生だからこそ、そのことを心を込めて学生に伝えようとお考えになったのだろうと、その人は言っています。

卒業後、私はクラス会の幹事をずっとしておりまして、先生はいつもご都合のつく限りクラス会においでくださいましたが、一昨年2007年の11月のクラス会に先生がおいでになったのが最後になりました。そのとき先生は私たちによりメッセージをくださいました。なんとおっしゃったかといいますと、「多くのクラスメートの皆さんが、古希を迎えたとうかがいました。80歳を超えると、いろいろと体

が思うようになりません。ですから今のうちにできるだけ自分のしたいことを、自分の納得のいく仕事をしてください。70代を花の70代にしてください」とおっしゃったんです。そして今年の5月30日、クラス会当日の朝、友人であり先輩である酒井敏正先生から電話をいただき、末永先生が入院されていることを知りました。私はこの知らせは天のお導きだと思いました。そしてクラス会のあと、3名が代表してお見舞いに伺い、先生にお会いしました。私たちの声をお分かりになったご様子で、うれしくなった私たちは先生と握手しました。そうしましたら先生はしっかりと握り返して下さったんです。すごくうれしかったです。考えてみますと、この年になるまで、つまり私たちが古希を迎えるこの年まで先生のお話をうかがえたこと、先生からたくさんのお話を教えていただいたことを感謝したいと思います。そして必ずや花の70代を目指したいと思います。先生のご冥福をお祈りいたします。

佐藤先生：続いて、奥様の和子様をお願いしたいと思えます。

末永和子様：今日は皆様のお心遣いで主人を偲ぶ会を催していただきまして、ありがとうございます。皆様のお話をうかがいまして、再度主人を身近に感じることができました。人生にいつか終りがあることは納得していましたが、この一年近くあいだ病状が進んでいく主人を見守りながら、自分の目の届かない彼方に去っていくのは考えたくありませんでした。5月に入ってから、自分でも病状が進んでいくのが分かったらしく、折に触れてさよならのメッセージを口にするようになりました。「これからは一人で生きていきなさい」「これまでの人生、面白かったかい」「毎日楽しく暮らせてきたかい」いろんなことを話しました。「とっても楽しかったよ。おかげさまでよい人生だった。感謝しています」と最大限のお礼で答えました。誰の悪口も言わない、怒らない温厚な主人で、60年のあいだにけんかをしたことはありませんでした。

主人は初めて行った外国のアメリカが大好きでした。ニューヨークに着き旅の荷をほどくと行きつけの本屋さんに出かけました。そして本屋さんに入ったらもうなかなか出てきませんでした。ダウンタウ

ンとニューヨーク大学の構内の二か所にお気に入りの本屋さんがあり、たくさんのお買い物をしてくれそうでした。あと何年生き続けてあの本を読むつもりなのかなあ、とそばで見えていました。ロンドンも大好きで、着くとまず最初に行く場所と、帰国の前日に行く場所が決まっていた。

ロンドンに着くとすぐ、地下鉄チャリング・クロス駅前にあるギルバート&サリヴァンのメダリオンを見て旅が始まります。一年中草花の美しいエンバンクメント公園を散歩します。そして帰る前日はテムズ川に架かる橋をぶらぶらと歩いて渡り、対岸のナショナル・シアターでコーヒー・タイムをし、旅の終わりにしていました。ロンドンでも本屋さんが大好きで、必ず行く本屋がありました。リージェント公園のすぐそばなので、私は公園の花を見ながら主人と時間を約束して帰るのを待っていたものです。湖水地方の観光地では主人がイギリスの老紳士に、「あなたの英語はパーフェクトで素晴らしい」と褒められていました。「英語の大学教師なのにねえ」と言ってふたりで笑ったものです。これからは主人と訪ねた旅の思い出を呼び戻しながら生きていこうと思います。

主人を送った夜にビデオで「南太平洋」の映画を家族で見ました。「魅惑の宵」にあんなにも感激した主人を思い出しながら、「86歳のおじいちゃんって本当にロマンチストだったんだなあ」と深いため息をついて言った孫の一言がとても心に残りました。「魅惑の宵」の素敵なおじいちゃんのパートナーがこんなに太ったおばあちゃんでは幻滅だと息子が笑われました。あの世でお目にかかるまで、スリムになっていこうと考えています。どうもありがとうございました。

佐藤先生：続いて、ご長男の末永義明様お願いいたします。

末永義明様：本日は父が親交を頂きました皆様のご出席をいただき、心に残る素晴らしい集まりとな

りました。ご参加をいただきました皆様、発起人の皆様に感謝します。

父が6月18日に亡くなり52日が経過しましたが、私はこのことを受け入れることが出来ておりません。父は大きな存在であり、父の優しさ、気遣いに幸せを感じており、父がいなくなるなど考えたこともありませんでした。子どもの頃の記憶では、父は朝から夜までたいへん忙しくしており、書斎から出るのは食事のときだけ、夜に書斎の電気が消えることはありませんでした。食卓ではよく、素晴らしい先輩、同僚、後輩の皆様のご話が話題となりました。子どもながらに、父の周りにはなんでこんなに素晴らしい人が集まるのだろう、と思ったものでした。新年会などの機会には皆様に自宅までお集まりいただくこともありました。父と母は前日より準備に余念がありませんでした。会がお開きとなり皆様帰られた後の余韻を楽しむ父を何度も見たことがあります。父にとって、ご親交をいただきました皆様とのひときは何にも替え難いことだったようです。

父の病気は難病でしたが、昨年12月頃は病気の進行も遅く、進行を抑えれば医学の進歩により回復するのではないかと感じておりました。このことを父に伝えると、「それは無理だ」というのが父の反応でした。父は病状の進行を理解していたように思います。父は5月11日に緊急入院をし、苦しい闘病生活が始まりました。必ず回復することを信じておりましたが、我慢強い父にとってもたいへん苦痛のようで、少しでも癒しになればとミュージカルやギルバート&サリヴァンのCDをかけました。お見舞いにいただいた「南太平洋」の「魅惑の宵」の音楽が父への最良の癒しとなりました。父は苦しいときを何度も乗り越えました。最期は6月18日、「魅惑の宵」を聞きながら、息をひきとりました。父は素晴らしい諸先輩方、同僚の皆様にお囲まれ、充実した一生を送ることができました。最後までご親交いただいた皆様に、心より感謝いたします。

末永國明先生の軌跡

【末永國明先生略歴】

末永 國明（すえなが くにあき）

1922年（大正11年）10月27日、茨城県水戸市に生まれる。東京文理科大学英語学英文学専攻卒業。ガリオア留学生として、1951-2年（昭和26-7年）にノースカロライナ大学大学院に留学。東京都立第四中学校教諭、東京高等師範学校附属中学校教諭、東京教育大学文学部講師、同助教授、同教授、埼玉大学教育学部教授、埼玉大学附属中学校長、埼玉大学教育学部長、文教大学文学部教授を歴任。埼玉大学名誉教授。2009年（平成21年）6月18日逝去。

【末永國明先生著書一覧】

一般書

『英語のバックグラウンド』 共著、1964、日本放送協会。

『ドライサー』 共著、1967、研究社。 『欲望という名の電車・他』 1972、英潮社。

『戦後アメリカ演劇の展開』 共編著、1983、文英堂。

『高校英語教育の実際』 共著、1988、文英堂。

『杏子忌』 1988、埼玉大学教育学部附属中学校英語科編。

教科書

The New World Readers 1, 2, 3 (1960-68)

Essential English Usage 1, 2, 3 (1963-74)

The New World Readers (New Edition) 1, 2, 3 (1967-74)

English for Young Citizens 1, 2, 3 (1963-74)

Better English for You 1, 2, 3 (1963-74)

Unicorn English Course 1, 2, 3 (1973-83)

Unicorn English Composition 1, 2, 3 (1973-83)

Unicorn English Grammar (1973-83)

Unicorn English Course I, II (1982-95)

Unicorn English Readers II B (1983-96)

Unicorn English Composition II C (1983-96)

Unicorn Grammar-Based English Composition II C (1986-96)

The Rainbow English Course I, II (1985-95)

Unicorn Advanced English Readers II B (1990-97)

Unicorn English Course I, II (1994-2003)

Unicorn English Reading (1995-2004)

Unicorn English Writing (1995-2004)

Powwow English Course I, II (1994-)

Powwow English Reading (1995-)

Powwow English Writing (1995-)

Apricot English Course I, II (1994-2002)

Treasure Land English Reading (1996-2004)

Surfing English Course I, II (2003-)

Surfing English Reading (2005-)

Open Door to Oral communication I, II (2003-)